

番外編 大阪の福島にて

登場人物

彼氏

彼女

少年

おばちゃん

女

大阪、日本橋、国立文楽劇場の前。売れないユーチューバー、カレカノチャンネルの二人が撮影（収録）をしようとしている。五月の頭、ゴールデンウィークの初日。もう日差しがきつい。

彼氏「ヒアりに噛まれてみたってどうかな」

彼女「いいんじゃない」

彼氏「あーでも炎上するか。ヒアリだけに」

彼女「焼けちゃうから」

彼氏「ヒアリだけに？」

彼女「日に焼けるから」

彼氏「あっごめん、回すね（カメラ回す。3,2,1）彼氏で一す」

彼女「彼女です」

彼氏「カレカノチャンネルをご覧の皆さん、こんにちは」

彼氏彼女「彼氏彼女です」

彼氏「えー本日はカレカノチャンネル番外編として、なんと大阪に来ています。えーここはどこでしょう。（カメラを上部の看板に向けて）じゃーん、国立文楽劇場です。文楽って知ってる？」

彼女「人形劇でしょ」

彼氏「まあ、一言で言ったらそうなんだけど、文楽っていうのは人形遣いと三味線と太夫（たゆう）、太夫っていうのは語りね。この、三位一体の芸術なんですよ、あんま興味ないでしょ」

彼女「なくはないけど、大阪って言ったらもっと他にあるじゃん、たこ焼きとか、通天閣とか、あ、あべのハルカス行きたい」

彼氏「グルメロケは後のお楽しみということで。（チラシを見せ）今日はこの『心中天の網島（しんじゅうてんのあみじま）』っていう文楽を見てきます。近松門左

衛門は日本のシェイクスピアと呼ばれてて」

彼女「あべのハルカスは？」

彼氏「あべのハルカスはあるだよ。では行ってきまーす（手を振る）以上、彼氏彼女でしたー（カメラ終了）」

彼女「ねえ、もっと若者向けなところ行こうよ。てゆうか私をアホみたいにしないでよ。ネットの情報でしょ」

彼氏「ごめん、でもみんな知らないからさ（入り口を指差し）行こ」

文楽劇場へ入場。

終演後、出てきて。

彼氏「（カメラ回す。3,2,1）いやー、良い席だった。良い席だったね。だってこう、目の前にさ、人形って三人で動かすんだね」

彼女「なんで泣いてたの？」

彼氏「だって最後さ、二人が別々に死ぬんだよ。互いを思い合っさ」

彼女「てゆうか、死ぬ必要あった？」

彼氏「え？」

彼女「だって、彼氏がしっかりしてたらさ、死ぬ必要なかったじゃん。あんなクズみたいな貧乏人の男じゃなくて、もっとしっかりしたお金持ちのお侍さんだったら、幸せになれたじゃん」

彼氏「それはそうだけど」

彼女「でも一番可哀想なのは奥さんと子供だよ、残されて」

彼氏「きっと、死ぬ以外なかったんだよ」

彼女「はあ？男に努力が足りないだけじゃん。もっと言うとそこまで好きじゃなかったんだよ、あの、小春のこと」

彼氏「好きだよっ」

彼女「……」

彼氏「いずれにせよそんなハッピーな話、誰も惹かれないでしょ。報われぬ恋とか、叶わぬ結婚とか、そういう悲劇にさ、人は惹かれるんだよ」

彼女「私はハッピーな話の方が好きだけどな。だって救われないなんて苦しいじゃない。なんで惹かれるの？」

彼氏「さあ、自分より最低な奴を探してるんじゃない」

彼女「最低な奴？」

彼氏「うん」

彼女「だったら、そいつが一番最低じゃない」

彼氏「え、あ、そうね……あ、え一次はですね、福島というところに『占い商店街』という面白い商店街があるそうなので、行ってみたいと思います。以上、彼氏

彼女でした」

福島聖天通商店街、占い館の前。

彼氏「（カメラ回す。3,2,1）いやーたこ焼き美味しかったですね。堂島ロールもお得に買えました。えー占いなんですけど、撮影がNGということで、また後でご報告します。以上、彼氏彼女でした」

彼女占い館から出てくる。後ろから彼氏。

彼氏「ちょ、ちょっと待ってよ」

彼女「ついてこないで」

福島区、下福島公園。ここはプールやジョギングコースなどがある巨大な公園である。区の花に指定されている野田藤も栽培されている。

先に行く彼女、後ろに彼氏。

彼氏「ごめん」

彼女「もういいから」

公園のベンチ、頭上に藤棚がある。少年がベンチで寝ている。おばちゃんが座っている。彼女ベンチに座る。彼氏も少し離れて座る。

沈黙。

おばちゃん「先週まできれかったけど、すぐやね」

おばちゃん「あちこちに咲いとるからどこですかーゆうて」

おばちゃん「阪神野田のところはまだ咲いてるやろか」

おばちゃん「早めに切ったらんと来年咲かへんからね」

彼氏彼女「何」

彼氏「何がですか？」

おばちゃん「吉野の桜、高尾の紅葉、野田の藤ゆうて関西の三大名所。知らんの？野田藤」

彼氏「はい」

おばちゃん「どこから来たん？そんな荷物持って」

彼氏「東京です」

おばちゃん「学生さん？」

彼氏「いえ、まあ、そうです」

おばちゃん「ええ身分やね」

彼女「この人フリーターです」

彼氏「あ、ユーチューブって多分ご存じないと思うんですけど、そこで活動してます。まだまだですけど」

おばちゃん「えっ、ユーチューバーなん？」

彼氏「えっ、知ってるんですか」

おばちゃん「もちろん。HIKAKINとかヒカルとかマックス村井とか見とるよ。他にもたくさん。うちは下品なのが好きやね。どんな企画なん？」

彼氏「ああ、僕というか僕らは彼氏彼女チャンネルっていうチャンネルで」

おばちゃん「（スマホを取り出し）見たるわ、なにになに……彼氏彼女でプリクラ撮ってみた。遊園地行ってみた。普通やん、普通のカップルやん」

彼氏「いや、でも熱めのお風呂に入ってみたとか、ちょっと贅沢してみたとか」

おばちゃん「仲良いんやな、羨ましいわ」

彼女「そんなことないです。さっきもお金節約してロールケーキの切れ端買ったり、たこ焼き1個ずつだったり。占いしてきたんですけど、あの、買っても占い商店街で。そしたら二人の恋愛運が最悪で、でもこの人のせいなんです。働かないし、将来のことも全然考えないし」

少年「（うなされたように）淀川大橋、船津橋、上船津（かみふなつ）橋、堂島大橋、田蓑（たみの）橋……淀川大橋、船津橋、上船津橋、堂島大橋、田蓑橋……」

彼氏「大丈夫かな」

おばちゃん「（顔を見て）大変、この子顔真っ赤やで」

彼女「冷やす物、早く」

彼氏「あっ、どうすれば良い？」

彼女「タオル冷やしてきて」

彼氏「タオルは？」

彼女「（首に）かけてるでしょ」

彼氏「（水道へ）」

彼女「（ペットボトルを取り出し）大丈夫？飲んで」

彼氏「戻ってくる、あたふた）」

おばちゃん「何つったとんねん（タオルを取り少年の首を冷やす）もう日差しきついでからな。下手したら死んどったで。念のためそこの病院行こか」

彼氏彼女、少年を起き上がらせる。

少年「堂島大橋に行かなきゃ」

彼女「病院行ってからね」

少年「彼女が待ってる」

おばちゃん「おーやるやん」

彼女「じゃあ連絡しよっか、あれならお姉さんがするよ」

少年「……」

おばちゃん「堂島大橋ゆうたら、すぐそこやろ。あれやったらおばちゃんが連れてきたんで」

彼女「彼女見たいだけでしょ」

おばちゃん「ちゃうよ」

彼女「彼女が好きなんだね」

少年「（うなづく）」

彼女「羨ましいな」

彼氏「なんだよそれ」

少年「福島だよ、ここ」

おばちゃん「せや」

少年「福島だよ、ここ」

おばちゃん「せや福島や」

少年「彼女が待ってる」

彼氏「またそれかよ。この子、警察に引き渡した方がいいんじゃない？服も汚れてるし、もしかして家出少年かも。家に帰れない理由でもあるの？パパとママと喧嘩した？」

少年「家出じゃないもん」

少年、スマホを取り出し、ツイッターの画面を見せる。

彼女「ツイッター？」

少年「（頷く）」

彼女「『福島の橋で待っています』福島の橋で待っています？」

少年「うん」

彼氏「（スマホを見て）4月のツイートじゃん。これ誰？お友達？同級生？」

少年「わからない」

彼氏「わからないって。え、わからないの？」

少年「わからない」

彼氏「pink51さん？」

少年「うん」

彼氏「橋ってどこの橋？」

少年「五つある」

彼氏「いやだから」

少年「ぐるぐるしてたら会える」

彼氏「(彼女に) この子おかしいよ。言ってることめちゃくちゃだし、告ってもないのに彼女だなんて。立派なストーカーじゃん」

彼女「弟子にしたら？」

おばちゃん「一番弟子やな」

彼氏「あ……」

彼女「これが最後のツイート？」

少年「うん」

彼女「pink51、ピンクが好きなのかな」

少年「そうだと思う」

彼女「51ってなんででしょうね？」

おばちゃん「五月一日生まれ、おお、今日や。もしくはイチローの背番号やな」

彼女「そうですね(笑)」

彼氏「ねえ、もしかして探そうとかしてないよね、彼女」

彼女「悪い？」

彼氏「顔も名前もわかんないんだよ。いるかどうかもわかんないじゃん。釣りかもしれないし」

少年「本当にいるもん」

おばちゃん「『君の名は』やな」

彼女「えっ見たの？おばちゃん」

おばちゃん「見てへん、でもすれ違い続けて最後には会うんやろ、君の名は言うて」

彼女「見てるじゃないですか」

彼氏「アニメではうまくいくさ、アニメでは。でも、こんなことは言いたくはないけど、福島と言ったら東北の福島だろ。福島って言われたら、誰もが思い浮かべるのは東北の福島だよ。あの震災があった」

おばちゃん「でも、ここの、うちに言わせたらここが福島や」

彼氏「いえ、別に大阪の福島の人々を蔑ろにするつもりはないんです。ただ可能性が高い方を選ぶべきだと言ってるんです。今の時代『福島の橋で待っている』と言われたら、東北の福島を選ぶのが普通でしょ。そっちの方が確率が高いから。それを大阪の福島に行くなんて、なんというか、こういう言い方はあれだけど、ひねくれているよ、君は」

彼女「ひねくれているのはどっちだよ、この子にしてみたら、何も変わらないじゃない。それに、東北の福島なら橋の数は数え切れないでしょ。確率でもさして変わらないわ」

彼氏「変わるよ」

彼女「変わらない」

彼氏「変わるよ」

彼女「別れる」

おばちゃん「（彼氏彼女に）もうやめ、（少年に）他になんか情報はないんか？メッセージとか」

少年「（首を振る）」

おばちゃん「写真とか何が好きとか何をしてたとか？」

少年「お話だけ」

彼女「お話？」

少年「（頷く）」

彼女「お話、見ていい？」

少年「（頷く）」

彼女「（遡ってツイートを見る）すごい、たくさん」

少年「うん、毎日」

彼女「素敵なお話ばかり」

少年「うん」

彼女「私も飛んでみたい」

少年「（頷く）」

彼女「……バッテリーある？カメラの」

彼氏「ああ、あるよ」

彼女「パソコンも？」

彼氏「うん」

彼女「放送するよ、生放送」

彼氏「えっ、何言ってんの？」

彼女「ネットで情報で呼びかけるの。pink51さんの耳にも入るかもしれない」

おばちゃん「おもしろなってきたで」

彼氏「え、ちょっと待ってよ。京都は？楽しみにしてたじゃない？」

彼女「最後の放送にしたい？」

彼氏「あ、まず、何をすればいい？」

彼女「これから生放送やりますってことと、今までの経緯をうちのツイッターでつぶやいて。で、影響力のある人に拡散させるの」

彼氏「拡散ってフォロワー300だよ」

おばちゃん「おばちゃんの出番やな。（スマホ画面を見せて）ほれ」

彼女「おばチャンネル、嘘でしょ。あの、おばちゃん？ジャスティンビーバーとも共演した」

おばちゃん「（鞆からマスクを出し）いつもは虎のマスクしとるからな。HIKAKIN やはじめしゃちょーにも拡散してもらおうわ、おばチャンネルならイチコロや」

彼女「ありがとうございます」

彼氏「準備できたよ」

彼女「じゃあ、生放送いける？おばちゃんも拡散お願いします」

おばちゃん「任せとき」

彼氏「(カメラ回す。3,2,1) 彼氏です」

彼女「彼女です」

彼氏彼女「カレカノチャンネルです」

彼氏「どうも皆さんこんにちは、彼氏です。今大阪の下福島公園にいます。えー今日はですね、緊急に」

彼女「皆さんに聞いて欲しいことがあります。この男の子が彼女を探しています。でも名前も顔もわかりません。情報は福島の橋で待っているってことと、pink51っていうアカウントネームしかありません。私たちのツイッターのリンクも貼っておきます。なんでも構いません、情報をお願いします」

彼氏「ヤバ、視聴者数、3万超えたよ、まだまだ伸びてる。コメントもすごいよ。

『協力する』『がんばれー少年』『福島県でも見てるぞー』だって。あ『少年、なんでその子が好きになったの？』だって。みんな気になってるよ」

少年「そ、それは……」

おばちゃん「なんやゆうてみ」

少年「つぶやきみてて、それで……」

彼女「それで？」

少年「眠れなくて……牛さんを数えてたとき、あのツイッターを見つけたんだ。バツタの兄弟の話、白いへびの話、恐竜と戦うお話、近くにいる気がした。気づいたら朝になってる。でも思ったの、この人はどうやって寝てるのかなって。もしかしたらひとりぼっちなんじゃないかって。だから今度は僕がお話をしたいって思ったんだ」

おばちゃん「なんやねん、今告ってどうするんや。まだおうてないやろ」

彼氏「(笑) こっちも盛り上がってます。『全米が泣いた』『俺の横でも寝てくれー』って。あれ、これなんて読むっけ？」

彼女「ん？蜷川？蜷川を探せ？」

おばちゃん「蜷川、蜷川ゆうたらここら辺を流れとった川やで」

彼女「流れとった？」

おばちゃん「せや、100年くらい前、キタの大火ゆう大火事があつてな、一面、焼け野原になったらしい。その時の瓦礫を蜷川に捨てたんや。そんで蜷川は埋め立てられてしもうた」

彼氏「蜷川ってなんか聞き覚えない？」

おばちゃん「ほら、あれや、近松の曾根崎心中とか心中天網島にも出てくる川や」

彼氏「文楽だよ、ほら今日見た。二人がたくさん橋を越えて死に場所に向かう。その時に流れる川だ」

彼女「埋め立てと一緒に無くなった橋もありますよね」

おばちゃん「そりゃあ、そうやろな」

彼女「あんな文章書く人なら、無くなった橋の上で待っていても不思議じゃない」

彼氏「うん」

おばちゃん「不思議やろ、どう考えても」

彼氏「（鞆を漁って）こいつの出番が来た」

彼女「あ、出た、五万したやつ」

おばちゃん「なんやそのメガネ」

彼氏「VRゴーグルと呼んでください。ボク、体は平気？」

少年「うん、もう平気」

彼氏「じゃあ江戸時代の福島にタイムトリップだ」

少年「（頷く）」

おばちゃん「なんや急展開やな」

彼氏、少年にVRセットをつける。

おばちゃん「あんたがつけたらええやん」

彼氏「子供用なんです。ヤフオクで売らなくてよかった」

おばちゃん「古い地図でええやん」

彼氏「それは禁句です。ボク、怖くない？」

少年「うん」

彼氏「よし、じゃあ失われた橋を探す旅に出発だ」

彼女「（手をつなぐ）大丈夫だよ」

彼氏「では、展開」

江戸時代の福島へ。

少年「おー」

おばちゃん「なんや、反応が薄いな」

彼女「何か見える？」

少年「紫色のお花。ここまで伸びてる」

おばちゃん「野田藤か、江戸時代は今の季節も咲いてたんやな」

彼氏「他には？」

少年「田んぼ」

彼女「田んぼ？」

少年「うん、ずーっと田んぼだよ」

彼氏「どんな田んぼ？」

少年「これくらいの高さで、緑色」

彼氏「僕らの姿は見えてる？」

少年「うん、服は違うけど」
彼氏「変換機能だね、どう違うの？」
少年「お姫様、汚い人」
おばちゃん「うちは？」
少年「変わらない」
おばちゃん「（服を見る）何でやろ」
少年「わっ、蜂だ」

少年、VRの蜂を払うように野田藤からちょっと逃げる。

彼女「大丈夫？いないよ」
少年「あ、あっちに家がある」
おばちゃん「おっ、川もあるかもしれんで」
彼女「そのお家の方に行ける？」
少年「うん」

下福島公園を抜けて横断歩道を渡る。

おばちゃん「気いつけや」

堂島大橋の前へ。

少年「あ、橋、川もあるよ」
彼女「どこ？」
少年「そこ」
おばちゃん「堂島大橋の前やな」
少年「誰もいない？」
彼女「うん、残念だけど。ここに蜷川が流れてるの？」
少年「うん、ここからあっちに流れてる」
彼氏「そっか、じゃあ、あのガソリンスタンドと、いわき病院の間くらいかな」
彼女「そうだね」

横断歩道を渡り、行こうとする。

おばちゃん「うちはここまでや。いつ彼女が来るかわからんやろ。堂島大橋で待ってとくわ。なんかあったら連絡するしな」
彼女「ありがとうございます。私たちも連絡します」
少年「おばさん、このメガネで、藤のお花見て」

おばちゃん「うちは顔でかいからな。もう暗くなるから行き」
少年「ありがとう」

お互い手を振り合う。少年は蜷川に行く。彼氏彼女は路地に行く。

彼氏「不思議だね、普通の道なのに、この子には川が見えてる」
彼女「そうかな、そんなに不思議かな。（少年に）何かいる？」
少年「よく見えない」
彼女「蜷はいるかな。えい（水をかける）」
少年「冷たいよ、えい（水をかける）」
彼女「もーやめてよ」
少年「あっ、お魚」
彼女「どこ？」
少年「おじさんの足元」
彼氏「ざばーん（水をすくう）」
少年「やめろよ、逃げちゃうじゃんか」
彼氏「ざばーん（水をすくう）」
少年「あ、橋だ、橋だ」
彼女「えっ、どこ？どこ」
少年「そっちにお寺ある？その前」

少年を先頭に走る三人。誰もいない。

彼女「行こ」
彼氏「ねえ、川の大きさってこれくらい？」
少年「うん」
彼氏「（川を飛び越える）ほっ、よっ、とお……」
彼女「何してんの？」
彼氏「どう？少年」
少年「落ちてるよ」
彼氏「笑ったでしょ、今」
少年「笑ってないもん」
彼氏「おじさんにもお話してよ、彼女だと思って」
少年「やだ」
彼女「おじさんは川を歩いてるうちに桃になって割られました」
少年「面白い」
彼氏「もー勝手に殺すなよ」

彼氏「そういえば同級生が亡くなったって話したじゃん。あれ、震災で死んだって言ったけど、本当は自殺なんだよ、震災の前日に死んだんだ」

彼氏「(タイ料理屋を見て) あ、モアイ。見て、すごい名前」

彼女「やめなさいよ」

少年「何？」

彼女「こっちの話」

彼氏「(ボクシングジムを見て。動きつけて) ボクシングやりたいな」

彼女「私も」

彼氏「君はやめたほうがいいよ」

彼氏「(道路の反対側を指し) 何あれ？」

彼氏、彼女、少年、道路の反対側へ。

彼女「逆櫓(さかろ)の松だって」

彼氏「ふーん」

彼氏「(カフェウインブルドンを見て。動きつけて) 錦織」

彼女「もーそれしか知らないでしょ」

道路の反対側、不自然な位置で女がこちらに背中を向けて立っている。

彼氏「あ」

少年「あ」

繋いだ手を解き、走る少年。VRゴーグルはつけたまま。

彼女「車、危ないよ！」

少年には蜷川に架かる浄正橋に女が立っているように見えている。

少年「あの」

女「誰？」

少年「あ」

女「なに？」

少年「あ」

女「(スマホがなり、耳に当てる) うん、着いた。ABCホール? ううん、全然待つてへんよ、来てくれてありがとう。あ、うちからも見えた(笑顔で手を振る)。もうやめて、恥ずかしいわ。うん、うちも好きやで(退場)」

少年「(VRゴーグルを外す。辺りを見渡す。『浄正橋跡』の石碑を叩く) うわー」

彼女「(近づいて) いやな女だったね」

彼氏「あの人は悪くないでしょ」

彼女「いやな女だった。いやな女だった……(背中をさする)」

少年「福島に行けばよかった。福島に行けばよかった。おじさんが言ったみたいに僕がひねくれてた。僕が間違ってた……」

彼女「何も間違っていないよ、だって福島じゃない。何も間違っていないよ」

彼氏「(スマホを見てスマホを彼女に見せる) 見て、おばちゃん。堂島大橋なう」

彼女「何これ。めっちゃ男は引き連れてんじゃん、てゆうか虎のマスクしてるし」

彼氏「下にスワイプしてみ」

彼女「え、嘘、橋がいっぱい。淀川大橋警備中、船津橋なう、上船津橋で待つ、田蓑橋なう……ツイッターが橋で溢れてる」

彼氏「コメントもやばいよ『東北の福島の橋にいます』『己斐橋(こいばし)にいます。広島 of 福島です』」

彼女「ねえ、みんな君の彼女を待っていてくれるよ」

少年「……気持ち悪い。本当に気持ち悪い」

彼女「え? 大丈夫?」

少年「そうじゃなくて嘘ついて」

彼女「嘘じゃないよ、(スマホを見せて) ほら」

少年「絶対来ないのに嘘ついて」

彼女「来るよ、来るかもしれないじゃない」

少年「本当に来るって思ったた? この人たちもそう思ってるの?」

彼女「少なくとも私はそう思ったたよ、思ってるよ。もちろんお祭り気分の人もあるかもしれないけど」

少年「これ返すよ(VRゴーグルを返す)。みんなに見られて、彼女が一番嫌がるのに。本当だけが希望なのに」

彼氏「ボクだって来るって信じてたから、熱中症になっても橋をぐるぐるしたし。

彼女のおかげで眠れたんでしょ? 本当じゃない」

少年「僕はただ、あそこで寝てただけだもん。彼女なんてはじめからいなかった」

彼女「嘘」

少年「本当、全部僕が作った作り話だもん」

彼女「ツイッターは?」

少年「ツイッターは……」

彼女「本当でしょ?」

少年「でも見えないと意味ないよ、体がないと」

彼氏「さっき、ちょっとだけだったけど楽しかったじゃん、水遊びしてさ、よかったらおじさんのとこ遊びに来る？東京、狭いお家だけど」

少年「おじさんたちはいいね」

彼氏「よくないよ、いや、いいよ」

少年「ほら、いいんじゃない、僕たちは幽霊だから」

彼氏「幽霊？なんかの代表みたいに言うなよ、さっきから、おい、バカ、一人の問題だろ、子供だからって無垢でピュアだなんて思ってないからな」

少年「バカって言うなよバカ」

彼氏「なんだよ、バカ」

少年「バカ、バカバカ」

彼女「ちょっとやめなさいよ」

彼氏「こいつが世界を知ってる少年みたいな顔してきたから、キモいと思っただけだよ」

少年「こんな世界なら死んだほうがマシだ」

彼氏「ほら、とってつけたようなセリフだ」

少年「あの人形の話みたいに」

彼氏「飛び降りてみろよ、橋なんてないぜ」

少年「車にぶつかってやる」

少年、道路に出ようとする。激しく取っ組み合う二人。

彼女「やめなさいよ、二人とも」

彼氏「大人のをなめるなよ、こら」

少年「ここはどこだ？」

彼氏「福島だよ、バカ」

少年「ここはどこだ？」

彼氏「福島だよ」

少年「おじさんには負けない」

彼氏「そんな悲劇で終われると思うなよ」

少年「希望なんてない」

彼女「（道路の方を向いて）嘘」

彼氏、少年、同じ方向を見る。

彼氏「あっ」

少年「あっ」

(了)